

を吹上と云、吹上の町は和歌山とつゞけり、吹上にも士の屋宅有、寺院多し、○中凡和歌山は天然の景色すぐれ、其上大國の城下なれば、神社佛寺いかめしく、其洒掃もきよければ、一入の光景をませり、

〔紀伊續風土記四若山〕總論

若山或は和歌山とも書す、元祿年中若山の文字に定めらる、若山の城地は、岡山又は吹上峯などいひし地にて、名草海部兩郡の界にして、雜賀莊に屬す、四面曠廓の中、岬然として特起せり、南に長峯あり、北に葛城ありて、屏障を列するが如く、其中間豁然として、東に拓て、那賀名草の曠野一瞬の中にあり、西蒼海に臨て、淡阿の諸山指點すべし、岡山近く南に連りて、萬松翁鬱として龍蟠虎踞の勢あり、紀川東より來て、郭北を繞て襟帶の形をなせり、天正十三年、豊臣太閤根來寺を滅し、太田城を降し、國中を統一して、羽柴美濃守秀長に賜ふ、此地の體勢城地に宜きを觀察して、親く自繩張を命じ、三月二十一日、鉦初あり、藤堂和泉守、羽田長門守、一庵法印を普請奉行として、本丸、二丸、其年の内工功竣る、秀長大和國郡山を居城とし、其臣桑山修理亮重晴入道して法印宗榮、尾州愛知郡地土三萬石を領すを以て、本國の城代として、同十四年より茲に在城して、若山の城と稱す、此地吹上濱の東に峙を以て吹上峯と號し、又岡山の北首にあるを以て岡山の名あり、然るに岡山の南和歌浦の諸山と其勢相接きて、和歌の名最四方に高さより、取て若山と名づくといふ、若の字をに用ること、實証新書、匈奴篇に、猶若子之、嬰慈母とあり、古事記、萬葉集にも、亦穉弱の義に用ふ、○中略慶長六年、町割ありて市廓を改易し、商賈百工四方より來り集り、日を重ね歳を歴て、漸都會の地とはなれり、元和五年、南龍公○德川頼宣封を本國に受られて、五月十八日、初て入國せらる、以前の大手口を改めて北を以て大手とし、京橋門の北通衢を開て本町とす、其餘市廓寺院の類し、ばく移易あつて、各其便に就しめ、猶城下の區域、人民を容るゝに足ざるを以て、東の方廣瀬の川を越て、新内村中野島村領に亘りて、市廓を開きて